

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 王 葆玟

本論文は玄学、すなわち中国魏晋南北朝期に『周易』（経に相当）と『老子』『荘子』（伝に相当）にもとづいて構築された新たな思潮について研究したものであり、著述の目的は玄学の全体像を明らかにするところにある。大きく引論と本論一二章、補論から構成されている。

著者は引論で、玄学の名称の由来、南朝玄学の科目、思想傾向、分期問題などを説き、自らの玄学研究の大まかな構想を示し、その構想にもとづいて、個別問題について専門的な分析を展開する。第一章のテーマは玄学の起源である。魏晋玄学は馬王堆帛書『易伝』を源とし、後漢末の劉表の荊州学を介して、揚雄『太玄』や王充『論衡』の影響をうけたと説く。第二章では玄学の社会政治背景を論じ、魏正始年間の改制運動が玄学の興起を大きく刺激したと結論する。この章の基本的なアイデアは、同著『正始玄学』（1987）で初めてのべられたものであり、現在、著者の観点に賛同する研究者も少なくない。第三、四章では玄学の討論形式と思想方法について分析し、その「清談」による「微言尽意」の方法は、『周易』繫辞伝の「書は言を尽くさず、言は意を尽くさず」と深い関係があるとのべる。第五、六章ではそれぞれ正始玄学家の夏侯玄・何晏・管輅・鍾会・王弼と、竹林の七賢の嵇康・阮籍・向秀・山濤・王戎らの事績や著作について分析している。

第七章以下の五章は、玄学の哲理を問題とするものである。第七章では漢代の宇宙生成論と王弼の本体重視の哲学の関係を論じ、通説とは違って、両者は絶対的に排斥しあうわけではなく、むしろ相容れる所も多いという。第八章では王弼『周易大演論』の佚文数節を発掘、輯本を編み、それによって漢魏数論の演変を論じ、形而上学の面では王弼の周易象数学のほうが漢のそれより優れていたとのべる。第九章では主に王弼の『老子注』と『周易注』を分析し、玄学が一種の道徳性理学の域に達していたことを明らかにする。第十章では現本の郭象『荘子注』には向秀『荘子注』の文章が多く紛れ込んでいるとし、両者をわけて論じ、郭象の学説をもって玄学存在論の極致と論定する。第十一章のテーマは玄学の人生論と人材論である。第十二章は玄学の影響と後世の評価ほかを問題にしており、本論文の結びに相応しい。

本論文の主要な成果は、（1）玄学が儒家思想と道家思想の間にあり、経典や学統の上では儒家の伝統を重んじているが、思想的にはかえって道家に接近することを、原文に即して論証したこと、（2）従来の理解と異なって、王弼の基本的な主張は「玄理をもって象数を統攝する」、あるいは「玄理を象数の中に寓する」所にあり、象数を破棄する傾向をもたなかったことを、佚文の発掘などを通して明らかにしたこと、（3）従来、玄学の歴史は魏晋に限られるとされてきたが、それ以後も玄学は続くとし、唐代の経学や道教の重玄学が魏晋玄学の影響下にあることを明らかにしたこと、などである。仏教思想との関係にほとんど言及がなく、哲学用語の使用にやや曖昧な所もあるなど、問題点もないことはないが、玄学の全体像をみごとに論じきっており、今後の玄学研究に欠くべからざる基本文献になることは間違いないところである。以上のことから、本審査委員会は全員一致で、本論文が博士（文学）の学位に値するとの結論に達した。